

# ベトナム語南部方言における d/gi/r の発音に関する 音響音声学的調査\*

グエン トゥ ハー<sup>†</sup>・濱岡 佑帆<sup>††</sup>・桐越 舞<sup>†††</sup>

【要旨】ベトナム語北部方言と南部方言の代表的な方言差として頭子音の d/gi/r の音価が挙げられる。本稿では、先行研究におけるベトナム語の方言別発音表記を整理した上で、南部方言における頭子音 d/gi/r の発音実態調査を行った。その結果、頭子音 d/gi では先行研究にはなかった有声硬口蓋破裂音 [ɟ] が確認された。また、先行研究で音声的ゆれがみられた頭子音 r については、有声そり舌はじき音 [ɾ] が比較的安定して確認された。『言語学大辞典』他は南部方言には頭子音 d・gi と r の音声的二項対立が保存されているとあったが、具体的なデータが示されていない。本稿では現代の南部方言における d・gi と r の二項対立が実態としてあることを、音響音声学的に明らかにした。

キーワード：ベトナム語、南部方言、音響音声学、記述言語学

## 1. はじめに

### 1.1 ベトナム語南部方言

ベトナム社会主義共和国（以下ベトナム）は東南アジアに位置し、人口は約 9762 万人である。人口の約 86% を占めるキン族の母語がベトナム語であり、ベトナムの公用語として使用されている。1945 年にベトナム民主共和国が独立宣言をした際にチュ・クオック・グー（Chữ Quốc Ngữ、以下クオック・グー）と呼ばれるラテンアルファベット表記が正書法として採用された。

ベトナムの最北から最南までは約 1650 km あり、各地方で方言がみられる。大きく分けて北部方言、中部方言、南部方言の 3 つに分かれ、それぞれの代表都市はハノイ市（Thủ đô Hà Nội）、フエ市（Tỉnh Thừa Thiên-Huế）、ホーチミン市（Thành phố Hồ Chí Minh）である。図 1 にそれぞれの地点を示す。ハノイ市を中心とした北部方言がベトナム語の標準語とされる。

『言語学大辞典』（1988）によるとベトナム語の標準語には母音は単母音 11 種 /i, e, ɛ, a, ɔ, o, u, ɯ, ʏ/ / ă, ɤ/, 二重母音 3 種 /iă, uă, uâ/, 子音は 22 種 /p, b, f, v, m, t, tʰ, s, z, d, l, n, c, ɲ, k, x, ɣ, ŋ, ʔ, h, w, j/ である。そして声調は 6 種ある<sup>1</sup>。

\*本稿は、グエン トゥ ハー (2021) 「ベトナム語東南部方言における子音の発音状況」 (卒業論文、大東文化大学) の一部を加筆修正したものである。

†本学会会員

††大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻

†††大東文化大学外国語学部非常勤講師

<sup>1</sup>『言語学大辞典』によると声調は次の 6 種である。

a 「水平な声調」(Thanh ngang) à 「懸かる声調」(Thanh huyền) á 「鋭い声調」(Thanh sắc)

â 「問う声調」(Thanh hỏi) ã 「倒れる声調」(Thanh ngã) ạ 「重い声調」(Thanh nặng)

川口・春日 (1998) ではベトナム語南部方言の母音は 11 種 [a:], [a], [ɤ], [i], [u], [ɯ], [e], [ɛ], [o], [ɔ], [ɤ:], 二重母音は 3 種 [iɤ], [uɤ], [ɯɤ], 子音は 23 種 [b], [k], [c], [j], [d], [ɣ], [h], [x], [l], [m], [n], [ŋ], [ɲ], [p], [w], [z/ɾ], [ʂ], [t], [tʰ], [tʂ], [ʒ]/[j], [s] とある。[ʔ] は子音として数えられていない。そして声調は「中部と南部では一部に明確な

ベトナム語の代表的な方言差の1つに頭子音の **d/gi/r** が挙げられる。『言語学大辞典』(1988: 764) では、**d/gi/r** は、クオック・グー上音声的対立があるものの、それらの音声的対立は北部方言ではすでに失われており、すべて [z] であると記されている。一方、南部方言では **d・gi** と **r** の音声的対立が保存されているという。

ベトナム語東南部方言母語話者である筆者 (グエン トゥ ハー) の内省でも、**d/gi/r** は北部方言とは異なる音であり、**d** と **gi** の音についてはほとんど同じく発音されていると認識している。これについてベトナム語、特にベトナム語南部方言の音声に関する先行研究を調べてみたが、ベトナム語の音声学的研究は十分にされておらず、参考文献が少ないことが分かった。またベトナム語の発音について音声表記、音韻表記がある場合でも音響データはなく、ベトナム語南部方言の音響データも同様に非常に乏しいのが現状である。

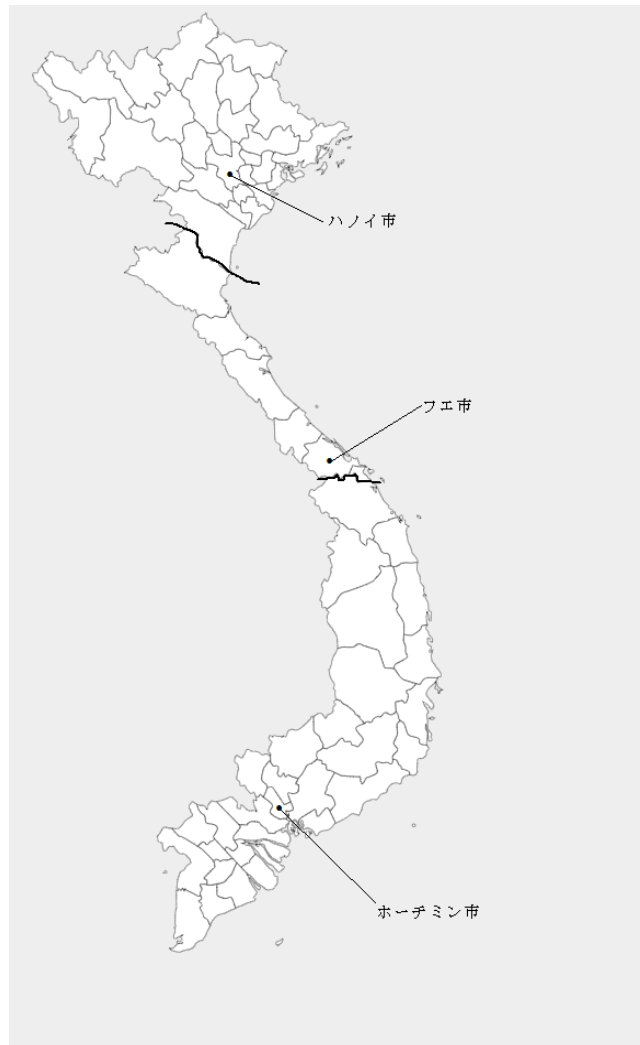


図 1 : ベトナムの方言区画と中心都市<sup>2</sup>

区別がなく 5 声になっています」と述べられており、「第 3 声タン・ホイと第 4 声タン・ガーが明確に区別されず、タン・ホイはタン・ガーと同じように発音されます」と記されている。以下に『こうすれば話せるベトナム語—南部標準語中心』(1998) における声調について、用例とともにまとめる。

- |       |                     |         |       |                       |          |
|-------|---------------------|---------|-------|-----------------------|----------|
| 第 1 声 | タン・ガン (Thanh ngang) | ma (幽霊) | 第 2 声 | タン・フェイン (Thanh huyền) | mà (接続詞) |
| 第 3 声 | タン・ホイ (Thanh hỏi)   | mả (墓)  | 第 4 声 | タン・ガー (Thanh ngã)     | mã (見かけ) |
| 第 5 声 | タン・サック (Thanh sắc)  | má (頬)  | 第 6 声 | タン・ナン (Thanh nặng)    | mạ (苗)   |

<sup>2</sup>本稿で提示する白地図は「白地図ぬりぬり (<https://n.freemap.jp/>)」を利用し、方言区画線・省名・市名は筆者が加筆した。

## 1.2 研究目的

ベトナム語北部方言と南部方言との代表的な方言差の1つに頭子音の d/gi/r が挙げられるが、南部方言はそもそも研究データが僅少で、音声学的分析も十分にされているとは言えない。そこで本稿の第1の目的として、ベトナム語の発音の表記法を調査することにした。ベトナム語の専門書だけでなく、辞書や語学書の中で頭子音 d/gi/r がどのように表記されているのかをまとめる。

そして第2の目的としてベトナム語南部方言における頭子音 d/gi/r の発音実態調査を行う。いくつかの先行研究において南部方言の発音上の特徴が挙げられているが、文字による記述が中心で音響データがない。そのため音響データと聴覚印象から発音を決定し、IPA をあてる作業を行なうこととする。南部方言母語話者（ホーチミン市を含む南部5都市出身の若年層）に対し頭子音 d/gi/r それぞれから始まる1音節語の読み上げ調査を行った上で音響分析を行う。

## 2. 先行研究

ベトナム語正書法による表記 d/gi/r の音価がどのように記述されているのかについて述べる。各種辞書、専門書・論文、語学書・教科書、Web上の語学学習教材の発音に関する部分を調べたところ、音素表記、音声表記、カナ表記のいずれかの記述、あるいはそれらを組み合わせた記述がされていた。図書別にみると、専門書・論文は音素表記あるいは音声表記が中心で、語学書・教科書は音素表記あるいはカナ表記で示されている。なお、辞典には共通項はみられない。

方言について特に言及がない場合は北部方言、言及がある場合も北部方言を扱う文献が多数を占めるが、南部方言との併記や中部方言・南部方言との併記をしているものもある。表1-1～1-3は、各文献とWeb上の語学学習教材における d/gi/r の音価をまとめたものである<sup>3</sup>。

d/gi/r に関する南部方言の調音様式として、d：接近音・摩擦音、gi：接近音・摩擦音、r：ふるえ音・摩擦音・はじき音がみられる。表1-1のdについては主に2種類のIPAが確認できた。有声硬口蓋摩擦音[j]と表記しているもの（『詳細ベトナム語辞典』2011、Nguyễn 2017、Hwa-Froelich 2002、法貴 2000、川口・春日 1998）と、有声歯茎摩擦音[z]としているもの（春日 2004、上條 1987）がある。なお、上條（1987）では[z] [ʒ] [ʒj]のバリエーションが記述されており、30年以上前の発音と現在の発音との変化がうかがえる。dの音声表記を[z]とする最も新しい文献は春日（2004）で、それ以降は[j]のみである。giについての音声表記もdと同様であり、dとgiを異なる音価としている『言語学大辞典』の記述と一致する文献はなかった（表1-2）。

rについては4種類のIPAが確認できた。有声歯茎ふるえ音[r]と表記しているもの（『詳細ベトナム語辞典』2011、Nguyễn 2017、春日 2004、法貴 2000、川口・春日 1998）、有声歯茎硬口蓋摩擦音[z]と表記しているもの（春日 2004、法貴 2000）、有声そり舌摩擦音[z]と表記しているもの（Huỳnh 2014、川口・春日 1998）、有声そり舌はじき音[t]と表記しているもの（Hwa-Froelich 2002）がみられる。春日（2004）や法貴（2000）の有声歯茎硬口蓋摩擦音[z]と有声歯茎ふるえ音[r]の併記、また、川口・春日（1998）の有声そり舌摩擦音[z]と有声歯茎ふるえ音[r]の併記からも、rが音声的ゆれの大きい音であることが分かる。

<sup>3</sup>北村（2017）は地域を明言していないが、「方言によっては」と他の音価を説明していることから、標準語である北部方言であるとみなした。大東文化大学のWeb学習教材も地域不明であるが、他の先行研究の音価と比較し北部方言を扱っていると判断した。また、東京外国語大学のWeb学習教材については、音声教材を筆者が聴取したものを提示している。

表 1-1：各文献と Web 上の語学学習教材における d の音価

(図書別・年代順に、音素表記・音声表記・カナ表記のあった文献を提示する。網掛け部分は本稿の調査と対照する音声表記であり、特に右側太字で示した南部方言の表記に着目する。表 1-2 の gi、表 1-3 の r も同様の提示をしている。)

		音素表記		音声表記		カナ表記		補足
		北部	南部	北部	南部	北部	南部	
辞書	日本語・ベトナム語・英語辞典 (2018) 詳細ベトナム語辞典 (2011) 言語学大辞典 (1988)	/z/	/j/	[z]	[j]	ザ	ヤ	
専門書/ 論文	Nguyễn (2017) 北村 (2017) Pham (2016) Huỳnh (2014) Bùi (2013) 清水 (2011) 春日 (2004) Hwa-Froelich (2002) 法貴 (2000) 上條 (1987) 竹内・日隈 (1979)	/z/	/j/	[d]	[j]	ザ行		地域不明 中央/中部の記述もあり
語学書/ 教科書	鷺頭・寺戸 (2020) 欧米・アジア語学センター・寺田 (2020) 金村 (2020) 三上 (2018) 欧米・アジア語学センター (2014) 佐川 (2008) 石井 (2006) 太田垣 (2006) 川口・春日 (1998)	/z/	/z/	[z]	[j]	ザ行 ザ行 ザ行 チャ、チュ、チョ、ジャ、ジュ、ジョ ザー ザ ザ	ヤ行またはジャ行 ヤー ヤ	中部の記述もあり
Web 学習教材	東京外国語大学 大阪大学 大東文化大学			[z]	[j]	ざ		筆者の聴取による 地域不明

表 1-2：各文献と Web 上の語学学習教材における gi の音価

		音素表記		音声表記		カナ表記		補足
		北部	南部	北部	南部	北部	南部	
辞書	日本語・ベトナム語・英語辞典 (2018) 詳細ベトナム語辞典 (2011) 言語学大辞典 (1988)	/z/	/j/	[z]	[j]	ザ	ヤ	
専門書/ 論文	Nguyễn (2017) 北村 (2017) Pham (2016) Huỳnh (2014) Bùi (2013) 清水 (2011) 春日 (2004) Hwa-Froelich (2002) 法貴 (2000) 上條 (1987) 竹内・日隈 (1979)	/z/	/j/	[j]	[j]	ザ行		地域不明 中央/中部の記述もあり
語学書/ 教科書	鷺頭・寺戸 (2020) 欧米・アジア語学センター・寺田 (2020) 金村 (2020) 三上 (2018) 欧米・アジア語学センター (2014) 佐川 (2008) 石井 (2006) 太田垣 (2006) 川口・春日 (1998)	/z/	/z/	[z]	[j]	ザ行 ザ行 ザ行 ヤ行またはジャ行 ザー ヤー ザ ヤ	ヤ行またはジャ行 ヤー ヤ	中部の記述もあり
Web 学習教材	東京外国語大学 大阪大学 大東文化大学			[z]	[j]	ざ		筆者の聴取による 地域不明

表 1-3：各文献と Web 上の語学学習教材における r の音価

		r		カナ表記		補足	
		音素表記 北部	音素表記 南部	音声表記 北部	音声表記 南部		北部
辞書	日本語・ベトナム語・英語辞典 (2018) 詳細ベトナム語辞典 (2011) 言語学大辞典 (1988)	/z/		[z]	[r]	ザ ラ	
専門書/ 論文	Nguyễn (2017) 北村 (2017) Pham (2016) Huỳnh (2014) Bùi (2013) 清水 (2011) 春日 (2004) Hwa-Froelich (2002) 法貴 (2000) 上條 (1987) 竹内・日隈 (1979)	/z/ /r/	/z/ /j/ /z/ /r/ /y/	[z]	[r]		中央/中部の記述もあり
語学書/ 教科書	鷺頭・寺戸 (2020) 欧米・アジア語学センター・寺田 (2020) 金村 (2020) 三上 (2018) 欧米・アジア語学センター (2014) 佐川 (2008) 石井 (2006) 太田垣 (2006) 川口・春日 (1998)	/z/		[z]	[r]	ザ行 ザ行 ラ行 (巻き舌) ラ行	中部の記述もあり
Web 学習教材	東京外国語大学 大阪大学 大東文化大学	/z/		[z]	[r]	ザー ラー ザ ラ ザ	筆者の聴取による
						ざ	地域不明

### 3. 調査

#### 3.1 調査協力者

調査協力者は言語形成期をベトナム南部で過ごした 8 名 (平均年齢 27.9 歳) である (表 2)。南部の中心地であるホーチミン市 (Thành phố Hồ Chí Minh) から 2 名の他、ブンタウ市 (Thành phố Vũng Tàu) 3 名、ビンフオック省 (Tỉnh Bình Phước) 1 名、タイニン省 (Tỉnh Tây Ninh) 1 名、ビンズオン省 (Tỉnh Bình Dương) 1 名にご協力いただいた。言語形成期を過ごした場所は表 2 を参照されたい。

表 2：調査協力者情報

	年齢	性別	言語形成期を過ごした場所	録音時の居住地
VT01	25	女性	ベトナム・ブンタウ市	ベトナム・ブンタウ市
VT02	25	女性	ベトナム・ブンタウ市	ベトナム・ホーチミン市
VT03	25	女性	ベトナム・ブンタウ市	日本・東京
HCM04	38	女性	ベトナム・ホーチミン市	ベトナム・ホーチミン市
HCM05	32	男性	ベトナム・ホーチミン市	ベトナム・ホーチミン市
BP06	21	女性	ベトナム・ビンフオック省	ベトナム・ホーチミン市
TN07	33	女性	ベトナム・タイニン省	ベトナム・タイニン省
BD08	24	男性	ベトナム・ビンズオン省	ベトナム・ビンズオン省



図 2：調査協力者 8 名の言語形成期を過ごした場所<sup>4</sup>

### 3.2 分析資料

調査対象である d/gi/r を頭子音とした 1 音節語を用いた (表 3)。母音、末子音を統一させた有意味語として、-a (da, gia, ra)、-an (dàn, giàn, rạn)、-ai (dài, giài)、-ã (dã, giã) を分析資料とした<sup>5</sup>。

表 3：分析資料

<b>d</b>	<b>gi</b>	<b>r</b>
da 肌	gia 家	ra 出る
dàn 配置する	giàn 足場	rạn ひび割れ
dài 帯	giài 解ける	
dã 野	giã 米をつく	

### 3.3 調査手順

録音は 2020 年 8 月～11 月にかけて行った。調査者は日本在住のため、日本在住の調査協力者とベトナム在住の調査協力者とで異なる録音手順を踏んだ。日本在住の調査協力者については対面調査を行った。調査者所有の iPhone 6s 録音アプリ High quality voice recorder 製 PCM Recorder Lite を用いて、サンプリングレート 44100Hz・量子化 16bit で録音した。

ベトナム在住の調査協力者については、調査の同意を得た後に調査票の文書ファイルを各調査協力者に送信し、調査者との通話で事前に発話練習を行った。その後、各自の自宅リビング

<sup>4</sup>注 2 に同じ。

<sup>5</sup>加筆修正元の論文では、d と gi との対照、r と g との対照を行っていたため、r は d/gi の分析資料とは声調が厳密に統一されておらず、調査語彙数も異なる。しかし、予備調査の段階で声調の差異による子音の変化が確認されなかったことから、dàn/giàn と rạn を同一グループとして扱うこととした。

で録音作業を行うよう指示した。調査協力者のスマートフォンにて Facebook メッセージアプリを起動し、調査者宛てに音声メッセージを送る要領で分析資料を読み上げてもらった。最後に、受信した音声を録音するための作業を行なった。調査者所有のスマートフォン iPhone 6s にて、Facebook メッセージアプリを再生しながら、録音アプリ PCM レコーダーを用いて録音した。なお、分析資料は 2 回ずつ読み上げてもらった。

### 3.4 解析方法

録音した音声は PC に取り込み、音声編集ソフト Audacity で分析対象にならない部分（ノイズや無音区間）を削除した。Praat (version 6.1.11) に読み込み原波形と広帯域スペクトログラムを表示させた後、TextGrid を利用して分析資料のベトナム語表記と IPA 表記を入力した。IPA 表記は筆者らの聴取および音響データの目視により決定したものである。

## 4. 結果

### 4.1 頭子音 d の IPA 表記と音響スペクトログラム

聴取による確認と音響スペクトログラムの目視によって子音を特定し、表 4 にまとめた。子音は、有声硬口蓋破裂音 [ɟ] および有声硬口蓋接近音 [j] が確認された。音響スペクトログラムはすべて提示幅 0-5000Hz、時間長 1000ms である。

図 3-1、3-2 は d の資料のうち、有声硬口蓋破裂音 [ɟ] だと判断したものの代表例である。音響スペクトログラム上の子音に該当する部分に細く鋭い縦線（スパイク）がみられる。このスパイクがあるので、破裂音だと分かる。図 3-1 の -VOT は 55ms で、子音から母音にかけてのフォルマント遷移は第一フォルマントが上昇、第二フォルマントが下降、第三フォルマントが下降である。第一フォルマントの上昇は子音の調音から母音の調音にかけて開口度が広がっていることを示す。舌と口蓋が接着することで開口度が狭くなり、後続の母音 /a/ の調音のために徐々に広がっていく様子が分かる。第二フォルマントの下降は子音の調音から母音の調音にかけて舌位置が後退していることを示し、子音調音時の舌位置が前寄りであることが分かる。したがって、聴覚印象と併せて有声硬口蓋破裂音 [ɟ] だと判断した。

表 4：頭子音 d の IPA 表記

	da (肌)	dàn (配置する)	dài (帯)	dã (野)
VT01	[jæ]	[jæn]	[jæi]	[jæ]
VT02	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT03	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM04	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM05	[æ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BP06	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
TN07	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BD08	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]

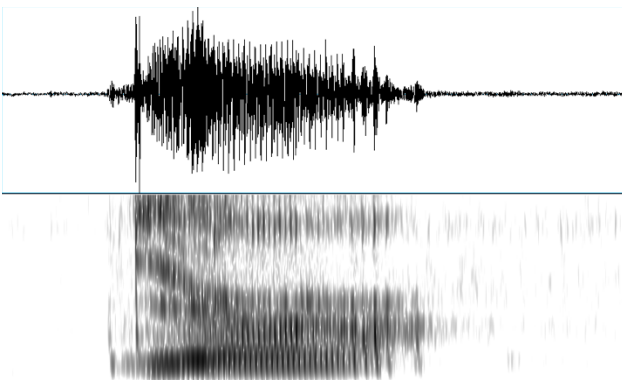


図 3-1 : BD08 da (肌) [j]

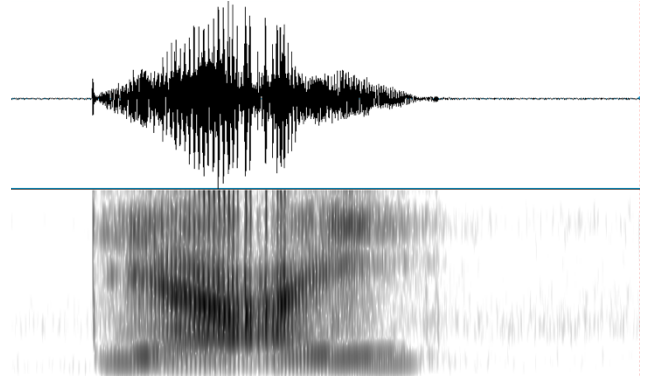


図 3-2 : HCM04 dai (帯) [j]

図 4-1、4-2 は d の資料のうち、有声硬口蓋接近音[j]だと判断したものの代表例である。音響スペクトログラム上では子音に定常部がなく、聴覚印象も日本語のヤ行に近いことから有声硬口蓋接近音[j]とした。その他、HCM05 の 1 例にのみ、子音脱落がみられた<sup>6</sup>。32 例のうち 24 例 (75.0%) の有声硬口蓋破裂音[j]は、先行研究では記述の無かった音である。

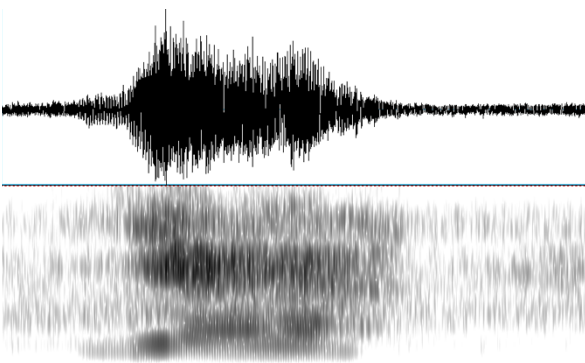


図 4-1 : VT01 da (肌) [j]

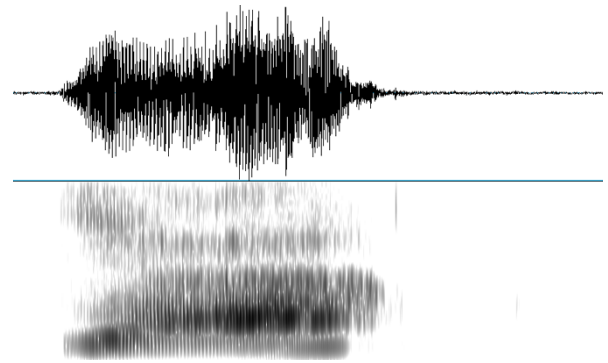


図 4-2 : BP06 da (野) [j]

#### 4.2 頭子音 gi の IPA 表記と音響スペクトログラム

聴取による確認と音響スペクトログラムの目視によって子音を特定し、表 5 にまとめた。子音は、有声硬口蓋破裂音[j]、有声硬口蓋接近音[j]および有声歯茎摩擦音[z]が確認された。

音響スペクトログラムと聴覚印象から、有声硬口蓋破裂音[j]だと判断したもの (図 5-1、5-2)、有声硬口蓋接近音[j]だと判断したもの (図 6-1、6-2) を示す。また、図 7-1、7-2 は gi の資料のうち、有声歯茎摩擦音[z]と判断したものの代表例である。子音部分に摩擦音特有の、すだれ状のノイズが出現している。聴覚印象も日本語のザ行に近いことから有声歯茎摩擦音[z]とした。その他、HCM05 の 1 例にのみ、子音脱落がみられた。32 例のうち 23 例 (71.9%) の有声硬口蓋破裂音[j]は、先行研究では記述の無かった音である。

<sup>6</sup>本調査における子音脱落の例は、『言語学大辞典』の言う「水平な声調」(Thanh ngang) のときのみ起こるという特徴は言及できる。しかし、1名の調査協力者のみにみられた現象であり、個人差・地域差・年代差・声調差等の要因をこれ以上探ることは難しいため、今後の課題とする。

表 5 : 頭子音 gi の IPA 表記

	gia (家)	giàn (足場)	giải (解ける)	giã (米をつく)
VT01	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT02	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT03	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM04	[jæ]	[jæŋ]	[zæi]	[jæ]
HCM05	[æ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BP06	[zæ]	[zæŋ]	[jæi]	[zæ]
TN07	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BD08	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]

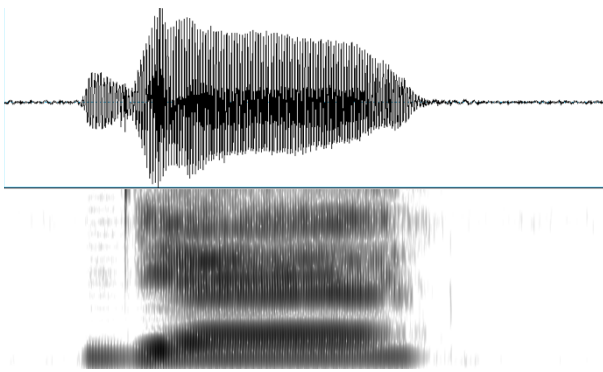


図 5-1 : VT03 gia (家) [j]

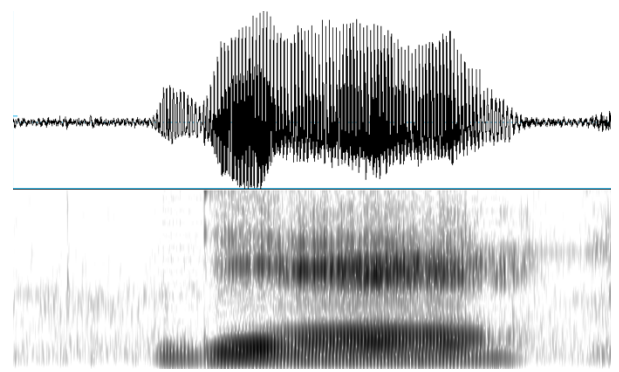


図 5-2 : VT02 gia (家) [j]

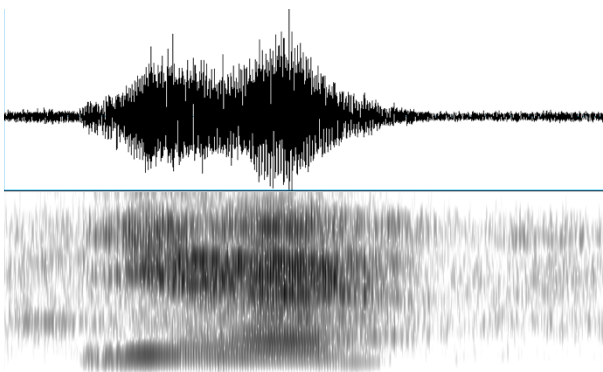


図 6-1 : VT01 gia (家) [j]

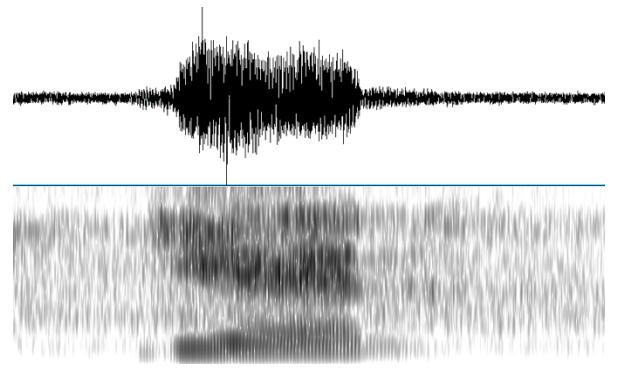


図 6-2 : VT01 giàn (足場) [j]

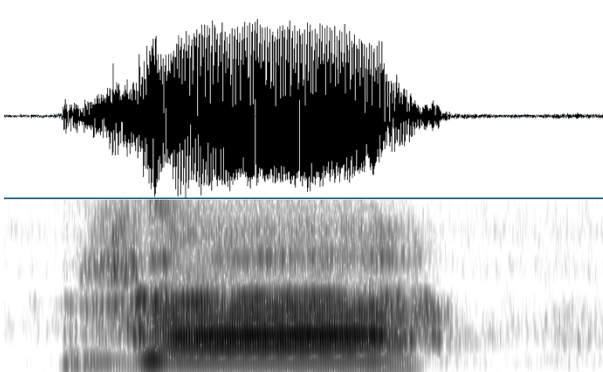


図 7-1 : BP06 gia (家) [z]

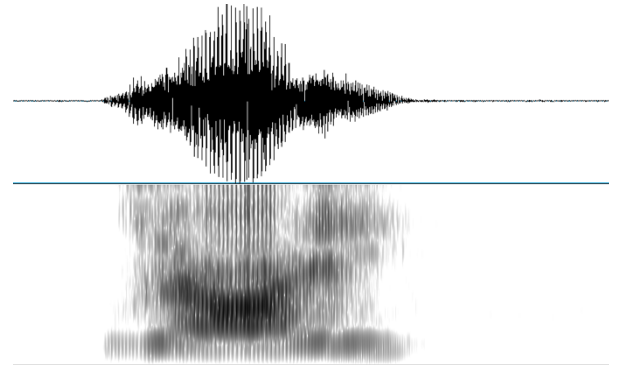


図 7-2 : HCM04 giải (解ける) [z]

### 4.3 頭子音 r の IPA 表記と音響スペクトログラム

聴取による確認と音響スペクトログラムの目視によって子音を特定し、表 6 にまとめた。有声そり舌はじき音[t]および有声軟口蓋破裂音[g]が確認された。図 8-1、8-2 は r の資料のうち、有声そり舌はじき音[t]だと判断したものの代表例である。音響スペクトログラムだけでは破裂音に見えるが、聴覚印象で舌のそりによるこもったような響きがあったことから有声そり舌はじき音[t]とした。その他、HCM05 のみ有声軟口蓋破裂音[g] (図 9) と子音脱落がみられた。16 例のうち 14 例 (87.5%) の有声そり舌はじき音[t]は、Hwa-Froelich (2002) にみられた記述と一致する。

表 6 : 頭子音 r の IPA 表記

	ra (出る) ran (ひび割れ)	
VT01	[ræ]	[ræn]
VT02	[ræ]	[ræn]
VT03	[ræ]	[ræn]
HCM04	[ræ]	[ræn]
HCM05	[æ]	[gæn]
BP06	[ræ]	[ræn]
TN07	[ræ]	[ræn]
BD08	[ræ]	[ræn]

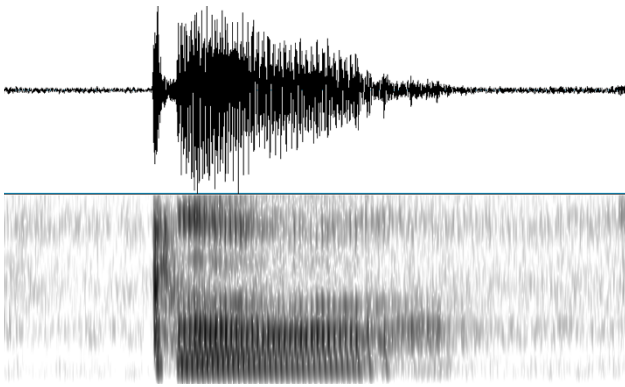


図 8-1 : BD08 ra (出る) [r]

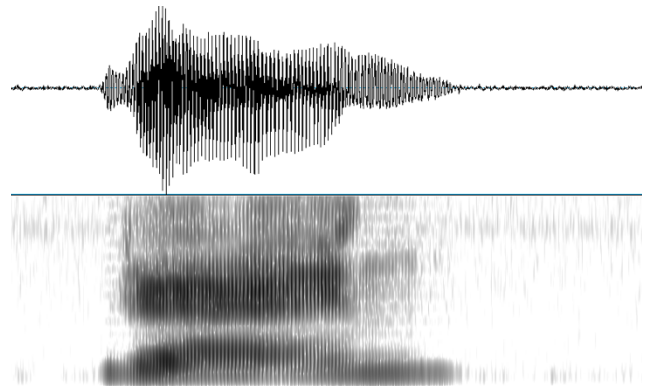


図 8-2 : VT03 ran (ひび割れ) [r]

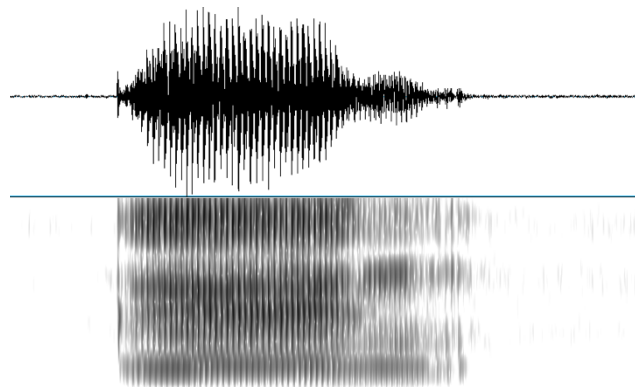


図 9 : HCM05 ran (ひび割れ) [g]

## 5. 考察

本調査において、声調による子音の変化はみられなかった。このことから声調別ごとに区別せずに考察を進める。

頭子音 d の発音は有声硬口蓋破裂音 [d̪]、有声硬口蓋接近音 [j] および子音脱落が確認できた。有声硬口蓋破裂音 [d̪] の出現率は 75.0% (24 例) であり最も高い割合を占める。一方、有声硬口蓋接近音 [j] の出現率は 21.9% (7 例) だった。南部における頭子音 d の発音は有声硬口蓋接近音 [j]、または有声歯茎摩擦音 [z] と記述している先行研究が多い中、有声硬口蓋破裂音 [d̪] を確認できたことはとても有益であろう。

分析資料の da (肌)・dàn (配置する)・dài (帯)・dǎ (野) すべてを有声硬口蓋破裂音 [d̪] で発音していた調査協力者は 8 名中 4 名であり、da (肌) のみ有声硬口蓋接近音 [j] で発音、または子音脱落した調査協力者が 2 名、dài (帯) のみを有声硬口蓋破裂音 [d̪] で発音し、それ以外の語を有声硬口蓋接近音 [j] で発音した調査協力者が 2 名だった (表 4')。現時点でこれらの発音のゆれは地域による違いであると断定することはできない。

表 4' : 頭子音 d の IPA 表記  
(網掛け部分が有声硬口蓋破裂音 [d̪])

	da (肌)	dàn (配置する)	dài (帯)	dǎ (野)
VT01	[d̪æ]	[d̪æŋ]	[d̪æi]	[d̪æ]
VT02	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT03	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM04	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM05	[æ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BP06	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
TN07	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BD08	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]

次に頭子音 gi であるが、こちらは有声硬口蓋破裂音 [d̪]、有声硬口蓋接近音 [j]、有声歯茎摩擦音 [z] および子音脱落が確認された。それぞれの出現率は [d̪] 71.9% (23 例)、[j] 12.5% (4 例)、[z] 12.5% (4 例)、3.1% (1 例) である。ここでは、頭子音 d では確認できなかった有声歯茎摩擦音 [z] が確認された。頭子音 gi では頭子音 d よりも調査協力者個人のゆれが多く観察された。例えば HCM04 の場合、gia (家) は有声硬口蓋接近音 [j]、giàn (足場) と giǎ (米をつく) は有声硬口蓋破裂音 [d̪]、giài (解ける) は有声歯茎摩擦音 [z] で発音している (表 5')。

先行研究における頭子音 d/gi は、有声硬口蓋接近音 [j]、有声歯茎摩擦音 [z]、有声後部歯茎摩擦音 [ʒ] などゆれがみられたが、標準語の北部方言が対立を失い (『言語学大辞典』: 764)、有声歯茎摩擦音 [z] で統合されていることを鑑みると、南部方言には古い音価が複数残っていると考えられる。この音価の統合が南部方言でも起こっているのではないだろうか。つまり、本調査は現代の南部方言の頭子音 d/gi の音価が有声硬口蓋破裂音 [d̪] に統合されつつある実態を捉えたのではないかという仮説が立てられる。

表 5' : 頭子音 gi の IPA 表記  
(網掛け部分が有声硬口蓋破裂音 [ɟ])

	gia (家)	giàn (足場)	giãi (解ける)	giã (米をつく)
VT01	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT02	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
VT03	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
HCM04	[jæ]	[jæŋ]	[zæi]	[jæ]
HCM05	[æ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BP06	[zæ]	[zæŋ]	[jæi]	[zæ]
TN07	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
BD08	[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]

最後に頭子音 r だが、有声そり舌はじき音 [ɾ]、有声軟口蓋破裂音 [g] および子音脱落が確認できた。それぞれの出現率は [ɾ] 87.5% (14 例)、[g] 6.25% (1 例) および子音脱落 6.25% (1 例) だった。HCM05 以外の調査協力者は全員すべての分析資料を有声そり舌はじき音 [ɾ] で発音した。先行研究にある有声そり舌摩擦音 [z]、有声歯茎硬口蓋摩擦音 [z] は確認されなかった。有声歯茎ふるえ音 [r] も確認されなかったが有声そり舌はじき音 [ɾ] は多数確認され、Hwa-Froelich (2002) の記述とも一致する。また、先行研究では頭子音 r の発音に様々な IPA が充てられていたが、本調査では比較的安定して有声そり舌はじき音 [ɾ] が確認されたことから、南部方言での代表的な発音だといえる (表 6')。

表 6' : 頭子音 r の IPA 表記  
(網掛け部分が有声そり舌はじき音 [ɾ])

	ra (出る)	rạn (ひび割れ)
VT01	[ɾæ]	[ɾæŋ]
VT02	[ɾæ]	[ɾæŋ]
VT03	[ɾæ]	[ɾæŋ]
HCM04	[ɾæ]	[ɾæŋ]
HCM05	[æ]	[gæŋ]
BP06	[ɾæ]	[ɾæŋ]
TN07	[ɾæ]	[ɾæŋ]
BD08	[ɾæ]	[ɾæŋ]

本調査において BP06 では頭子音 d/gi/r の音声的対立がやや確認できた。表 7 のとおり、この調査協力者は頭子音 d では dãi (帯) のみを有声硬口蓋破裂音 [ɟ] で発音し、それ以外の語を有声硬口蓋接近音 [j] で発音した。そして頭子音 gi では giãi (解ける) を有声硬口蓋破裂音 [ɟ] で発音しそれ以外の語を有声歯茎摩擦音 [z] で発音した。頭子音 r ではすべての語を有声そり舌はじき音 [ɾ] で発音した。このことから BP06 は d と gi の音声的対立をやや保っているといえる。しかしながら BP06 以外にこのような傾向はみられなかった。ベトナム語母語話者は学校教育にお

いては頭子音 d/gi/r 三項の音声的対立があると教わるようだが、実態は他の先行研究と同様に d・gi と r 二項の音声的対立がみられる傾向にある (表 8)。

表 7: BP06 における d/gi/r の音声的対立

da (肌)	dàn (配置する)	dài (帯)	dã (野)
[jæ]	[jæŋ]	[jæi]	[jæ]
gia (家)	giàn (足場)	giải (解ける)	giã (米をつく)
[zæ]	[zæn]	[jæi]	[zæ]
ra (出る)			rạn (ひび割れ)
[ræ]			[ræŋ]

表 8: 本稿の結果と先行研究の南部方言に関する音声表記

	音声表記 (南部)		
	d	gi	r
本稿 (2021)	[j] [j]	[j] [j] [z]	[r] [g]
Nguyễn (2017)	[j]	[j]	[r]
Huỳnh (2014)			[z]
Bùi (2013)			[g]
詳細ベトナム語辞典 (2011)	[j]	[j]	[r]
春日 (2004)	[z]	[z]	[z] [r]
Hwa-Froelich (2002)	[j]	[j]	[r]
法貴 (2000)	[j]	[j]	[z] [r]
川口・春日 (1998)	[j]	[j]	[z] [r]
上條 (1987)	[z] [ʒ] [ʝ]	[z] [ʒ] [j]	

## 6. おわりに

本稿ではベトナム語南部方言における頭子音 d/gi/r の発音の表記法を調査し、発音実態を音響音声学的に分析した。表記法調査では頭子音 d の発音に関して音素表記、音声表記、カナ表記全てにおいて有声硬口蓋接近音 [j] が多数みられた。その他に有声歯茎摩擦音 [z] などの摩擦音も確認できた。頭子音 gi でも同様である。頭子音 r ではふるえ音、摩擦音、はじき音と多様な種類の調音様式がみられた。

音響データ分析からは、頭子音 d/gi では先行研究にはなかった有声硬口蓋破裂音 [ɟ] が確認できた。また頭子音 r は先行研究で音声的ゆれが大きかったにも関わらず、本調査では比較的安定して有声そり舌はじき音 [r] が確認された。本調査では 1 名のみに若干の三項対立が確認されたものの、その他の調査協力者ではみられず、d・gi と r という二項対立が主であった。

ベトナム語南部方言の研究は僅少であり、特に音声学的アプローチがされているものは非常に乏しい。本調査も南部地域を網羅した十分な研究であるとは言えないが、南部方言の音響音声学的研究の黎明期を担う一考察となることを望んでいる。今後も音響データを増強し、さらに詳細な調査をすることが課題である。

【参考文献】

- Bùi Thị Thanh Hương (2013) *Báo Phụ Nữ Tân Văn: Tiếng Việt Và Chữ Quốc Ngữ*. Khoa Học ĐHSPTPHCM. 44: 111-119. Hồ Chí Minh: Ho Chi Minh City University of Education.
- グエン トゥ ハー (2021)「ベトナム語東南部方言における子音の発音状況」卒業論文、大東文化大学.
- 法貴則子 (2000)「ベトナム人,カンボジア人,ラオス人学習者の音声上の問題点」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26: 183-197.
- Huỳnh Thị Hồng Hạnh (2014) *Ngôn Ngữ Phát Thanh Trực Tiếp Nhìn Từ Góc Độ Ngữ Âm*. Khoa Học ĐHSPTPHCM. 55: 72-81. Hồ Chí Minh: Ho Chi Minh City University of Education.
- Hwa-Froelich, Deborah, Barbara Hodson and Harold Edward (2002) Characteristics of Vietnamese Phonology. *American Journal of Speech-Language Pathology*. 11(4): 264-273. Rockville: American Speech-Language-Hearing Association.
- 石井良佳 (2006)『まずはこれだけベトナム語』国際語学社.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1988)『言語学大辞典』第1巻.三省堂.
- 上條厚 (1987)「ベトナム語の発音とベトナム語話者の日本語の発音に関して」国立国語研究所編『日本語教育論集』4: 25-40.
- 金村久美 (2020)『ベトナム人に日本語を教えるための発音ふしぎ大百科』ひつじ書房.
- 春日淳 (2004)「ベトナム語」川口裕司・森口恒一・斎藤純男編『言語情報学研究報告 4 通言語音声研究—音声概説・韻律分析—』63-78. 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
- 川口健一・春日淳 (1998)『こうすれば話せるベトナム語—南部標準語中心—』朝日出版社.
- 川本邦衛 (2011)『詳解ベトナム語辞典』大修館.
- 北村よう (2017)「ベトナム語母語話者の発音上の問題点：子音を中心に」『東海大学紀要』7: 23-36. 国際教育センター.
- 三上直光 (2018)『ニューエクスプレスプラス ベトナム語』白水社.
- Nguyễn, Thị Hai (2017) *Ngữ Âm Học Tiếng Việt Hiện Đại*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Thanh Niên.
- 欧米・アジア語学センター (2014)『新版はじめてのベトナム語』明日香出版社.
- 欧米・アジア語学センター・寺田雄介 (2020)『基礎からレッスン はじめてのベトナム語』ナツメ社.
- 大田垣晴子 (2006)『イラスト会話ブックベトナム—ベトナム語』JTB パブリッシング.
- Pham, Ben and Sharynne McLeod (2016) Consonants, vowels and tones across Vietnamese dialects. *International Journal of Speech-language Pathology*, 18(2): 122-134. Melbourne: Speech Pathology Australia.
- 佐川年秀 (2008)『まずはここから！やさしいベトナム語カタコト会話帳』すばる舎.
- 三省堂編集所編 (2018)『デイリー 日本語・ベトナム語・英語辞典』三省堂.
- 清水政明 (2011)『ベトナム語 (世界の言語シリーズ 4)』大阪大学世界言語研究センター 世界の言語シリーズ. 大阪大学出版会.
- 竹内与之助・日隈真澄 (1979)『基礎ベトナム語』大学書林.
- 鷺頭小弓・寺戸ホア著、五味政信監修 (2020)『ゼロからスタートベトナム語文法編』Jリサーチ出版.

# An acoustic-phonetic study on the pronunciation of d/gi/r in Southern Vietnamese dialects

Nguyễn Thu Hà<sup>†</sup>, HAMAOKA Yuho<sup>††</sup> and KIRIKOSHI Mai<sup>†††</sup>

The typical dialectal characteristics of the northern and southern dialects of Vietnamese are the initial consonant d/gi/r phonetic value. In this paper, we surveyed the pronunciation of the initial consonant d/gi/r in the southern dialects of Vietnamese, based on previous research on dialectal pronunciation markers. The results showed that the initial consonant d/gi had a voiced palatal plosive [J], which was not found in previous studies. In addition, in the case of the initial consonant r, which showed phonetic distortions in the previous study, was confirmed relatively stable as a voiced retroflex tap [ɽ]. The “Dictionary of Linguistics” and other sources state that the phonetic dichotomy between the initial consonants d/gi and r is preserved in the southern dialects, but no specific data are given. In this paper, we show that there is a phonetic dichotomy between d-gi and r in the modern Southern dialects, based on acoustic phonetics analysis.

<sup>†</sup>*Member of the Japan Experimental Linguistics Society*

<sup>††</sup>*Master's Program in Japanese Language and Culture.*

*Graduate School of Foreign Languages,*

*Daito Bunka University*

*1-9-1 Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo 175-8571, Japan*

*E-mail: s20233001@st.daito.ac.jp*

<sup>†††</sup>*Faculty of Foreign Languages,*

*Daito Bunka University*

*1-9-1 Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo 175-8571, Japan*

*E-mail: mkiri6pp@yahoo.co.jp*